

ディプロマ・ポリシーの各項目の達成は、以下に示す体系的教育をもって実現します。

①言語運用能力

既修外国語の英語に関しては、全学共通科目として1年次前・後期と2年次前期に「Communicative English I・II・III」を履修します。3年次には学部開設科目の「医学英語Ⅰ」を前期、「医学英語Ⅱ」を後期で履修し、全学共通科目の「Academic English」も選択可能です。これらを通じて国際的な医学・医療情報を入手し理解できるようにします。

初修外国語については、全学共通科目にて、1年次に「ドイツ語」、「フランス語」、「中国語」、「韓国語」から1科目を必修として履修し、言語を通じて国際的視野を持てるように準備します。

医療場面で重要となるコミュニケーション技術については、1年次の「大学入門ゼミ」、「医療プロフェッショナルリズムの実践」で少人数でのグループワークを行い、コミュニケーションの基礎を身につけます。2年次の「行動科学とチーム医療」ではコミュニケーションや自己表現の専門家を学外から招き、人との関わり方を更に深く修得するとともに、チーム医療を体験して理解する機会を持ちます。加えて、3～4年次の「症候論・PBL (Problem Based Learning) チュートリアル」では再び少人数でのグループワークにて医学的問題解決法を修得します。4～5年次の「医学実習Ⅰ」では、模擬患者さんとの医療面接を通じて、患者中心の医療を行えるように医療現場に即したコミュニケーション技術を習得します。これらの過程を通じて、日本語運用能力も併せて身につけます。

全学年にわたって、海外の提携大学への短期留学ができる制度を設け、広い国際的視野を有する医学者を育成します。

②知識・理解（21世紀型市民及び学士（医学）として）

全学共通科目の「学問への扉」や文系科目を含む「学問基礎科目」において、医学に偏らない幅広い視野を持ち豊かな教養を修得します。さらに、高度教養教育科目の「医療と法」を必修科目とし、医療における法的問題への関心を高めるように配慮しています。

医科学を学ぶ基礎となる専門基礎科目として、1～2年次にいずれも学部開設科目である「早期体験学習」、「医用物理学」、「医用化学Ⅰ、Ⅱ」、「医科生物学」、「数理科学」、「生物統計学」、「医療心理学」、「細胞生物学」、「分子遺伝学」及び「分子生物学」を履修します。

人体の構造と機能及び病態を学ぶ基礎医学として、2～3年次に「解剖学Ⅰ、Ⅱ」、「生理学Ⅰ、Ⅱ」、「生化学」、「内分泌学」、「免疫学」、「薬理学」、「病理学Ⅰ、Ⅱ」、「微生物学」及び「医動物学」を履修し、病態に即して臨床医学を学ぶ基礎を固めます。科目ごとに講義に加えて実習を行い（生理学と薬理学は合同で「生理・薬理実習」を開講）、体験を通じて知識の定着を図ります。

臨床医学は、3年次後期に基本事項を学ぶ「臨床総論講義」から始まり、学生が小グループに分かれて相互に講義を行う「症候論・PBL チュートリアル」に続いて、統合講義が4年次にまたがって行われます。統合講義は臓器別に内科系・外科系と関連基礎医学を含んだ15のユニット（放射線、内分泌代謝、精神神経、消化器、脳神経筋骨格、麻酔・救急災害、呼吸器、循環器、膠原病、生殖系、小児科、感染症、腎泌尿器、血液系及び皮膚感覚系）から成り、関連疾患を統合することで疾患群への理解を深化させ、臨床医学についての知識を統合します。

4年次に履修する医療の社会的側面に関する社会医学については、④に記します。

「医学実習Ⅰ」と並行して、「医療管理学・診断学」では医療安全、院内感染対策、慢性疾患管理についての知識を学び、診断学についても実践的な臨床推論の進め方を習得します。また、並行して「児童精神医学」と「漢方医学」を履修します。

6年次では臨床医学についての最新の知識の習得のために「医療総合講義」を履修します。

③問題解決・課題探求能力

1年次には全学共通科目の「大学入門ゼミ」や「主題科目」において、課題の探求方法についての基礎を身につけます。また、学部開設科目の「早期体験学習」ではチュートリアル方式で、医学的な課題について探求方法の基礎を習得します。さらに、「医療プロフェッショナルリズムの実践」では、学外実習の前

にグループワークにて実習時に遵守すべき事項を討論し、また実習目標を自ら設定します。加えて、自由科目の「早期医学実習Ⅰ」では、主として基礎医学講座において医学研究に触れる機会を提供しています。

2年次には「行動科学とチーム医療」で、チーム医療についてのグループワークを行い、チーム医療を実践する上での課題発見と解決に努めます。また、自由科目の「早期医学実習Ⅱ」では「早期医学実習Ⅰ」の研究体験や知識を更に深めることができますようにしています。

3年次では、「症候論・PBL チュートリアル」で少人数グループに割り当てられた症候について自己学習し、プレゼンテーション資料を作成し、教員の指導の下に他の学生向けに授業を行います。年度末には1ヶ月間の「医科学研究」があり、各自ひとつの講座等に配属され、研究についての基礎的な考え方や手法を学び、研究成果を教員の指導の下に学会等で発表することも可能です。

3、4年次には、「症候論・PBL チュートリアル」においてPBL チュートリアル方式で症例ベースの臨床課題を分析・探求し、診断に至る能力を高めます。

4年次の1月から始まる「医学実習Ⅰ」では、附属病院等で26診療科すべてを1～2週間ごとにローテーションし、患者さんに接する臨床実習を行います。診療に必要な技能を確認した後に、教員の指導の下に診療チームの一員として患者さんを診察し、診断や経過観察に必要な検査を選択しその結果を解釈し、さらに治療法について担当医等と共に検討し、総合的な診療能力を習得します。並行して行う「医療管理学・診断学」では、教員と学生が対話する形式で、症例に則して診断についての問題解決を図る方法を習得します。後半には、行動変容の臨床例検討、及び「医学実習Ⅰ」で経験した症例の発表会を実習のグループごとに行います。

5年次の1月からの「医学実習Ⅱ」では各自の進路を見据え、3週間を1クールとした選択臨床実習を行います。長期にわたり患者さんと密に接し、診療に必要な臨床技能を深め、実症例に則した広い視野での問題解決能力を習得します。最新の医療技術に接する機会も持ちます。

臨床実習中の2学年の学生が合同受講する「臨床病理検討会（CPC）」では、剖検を行った症例について臨床経過から診断名を推測し、病理所見から総合的に疾患を理解する力を養います。

④倫理観・社会的責任

1年次では全学共通科目の「ライフデザイン」において、21世紀型市民としていかに生きるかを学びます。学部開設科目の「医学概論」では、医学・医療を学ぶ上で必要な医の倫理、死生観やチーム医療及び医療安全等の基本的事項を学びます。

2年次の「行動科学とチーム医療」では、チームの一員として責任を持って医療に当たる際にチームを組む他職種の理解を深めるべく、近隣の医療系大学で見学実習を行い、また附属病院の各部署のスタッフから担当業務の説明を受けた後に附属病院での見学実習を行い、チーム医療の実際を体験します。

3年次の「臨床総論講義」では、医療における安全確保やチーム医療についての知識を再確認し、医療情報の取扱いについても修得します。「医科学研究」の前には、e-Learningにて研究倫理の修得を行うことを「医科学研究」修了の条件としています。

「医学実習Ⅰ、Ⅱ」では、それまでに学習した医師としての倫理観や社会的責任について、実症例に則して課題を抽出し、教員と共に解決を図ります。「医学実習Ⅰ」の開始と同時に開講する「医療管理学・診断学」では、臨床実習段階で求められる医療安全、院内感染対策について具体的に講義し、さらに学外専門家による生命倫理の講義を実例に沿って、一部実習を交えて行います。

⑤地域理解

1年次では全学共通科目の「ライフデザイン」や「特別主題（地域）」において、地域理解について基本的事項を修得します。「医療プロフェッショナリズムの実践」では、地域の医療機関と介護老人福祉施設をそれぞれ見学し、地域住民に身近な医療や介護福祉の現状を体験的に理解します。

2年次の「行動科学とチーム医療」では、山間地域の医療の実態や、在宅医療の実態について実践医の講義を受け、多様な医療のあり方を学習します。

4年次では、地域の保健・医療・福祉を理解するために、講義と実習からなる社会医学系科目を履修します。このうち「衛生学」では、地域の環境衛生を理解します。「公衆衛生学」では、社会保障や種々の福祉及び疾病政策についての制度や法規を学び、現地訪問調査等を行い、地域の実情について体験的に理解を深めます。「法医学」では、法律を運用する上で医学的判断を必要とする様々な問題について学びます。地域における死因の特徴も併せて学びます。

「医学実習Ⅰ」では、必修で1週間の地域医療実習を行います。県内の地域中核病院や診療所で少人数の実習を行い、各地域における医療体制や疾病構造の違いなどについて理解を深めます。「医学実習Ⅱ」では、3週間にわたって地域中核病院等で実習を行うコースを設け、福祉・医療面での地域の実態をより深く理解し、地域医療機関の果たす役割を現場で認識し、将来の地域医療の実践に向けて意識を高めます。